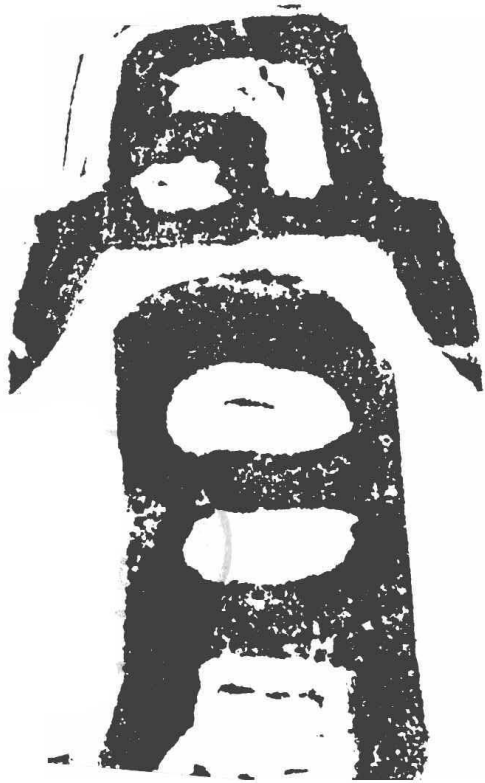
金泰生

金泰生



骨　片　　0093—0084—4249

1977年9月22日　第1刷発行

著　者　金泰生（キム テ セン）
発行所　株式会社　創樹社
電話 東京 03-815-3331～2
振替 東京 2・154580
東京都文京区湯島 2-2-1　〒113
装　丁　田村義也
本文印刷　東京美術
装丁印刷　広陵
製　本　美行製本

1977 © Kim Teseng　乱丁・落丁本はお取り替えします

金泰生

骨片

創樹社

装丁　田村　義也

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

童話 5
少年 33
骨片 97
ある女の生涯 181
あとがき 205

童話

「早く、起きな、信之(シンノ)、これから、出かけるんだから」

信之はぐっすり眠っているところをいきなりゆり起こされた。眠くてたまらなかったけれど、信之はすぐに眼をさました。両手で眼をこすって房(バン)(部屋)の中をぼんやり見まわしてみたが、まっくらで何も見えない。まだ夜なのだ。オモニは石油ランプもつけないで暗がりの中で手早く寝床のしまつをすませた。きっとランプの燈油がなくなったに違いない。そうでなかったらいつも用心深いオモニが燈りをつけないはずがないだろう。でも、出かける仕度はもうすっかりできていたらしかった。信之を背負い、ちっぽけな布包みらしいものを胸にかかえこんだオモニは、しばらく房の中に突っ立っていた。何か、うっかり忘れたことはないかと確かめていたのだろう。ほんとうに、暗いときに燈りがないのは不便なことだ。でも、なにもかもうまくはかどって

いるようだった。オモニは念入りに戸締りをすませてから、いそいで庭へ出た。

信之は、オモニがこれからてっきり母屋の方へ行くものだと思った。この離れの小屋を貸してくれている花玉婆さんに、いつものようにるすをたのむのかと思ったら、そうではなかった。オモニは足音をたてないでそろそろと暗い中庭をよこぎって行った。門のところまで来ると、オモニは大切なものをていねいにあつかうときみたいに大げさな手つきでかんぬきをそうっと外した。丸太をくみあわせた重い門は、開けるときだしぬけにぎりぎりいっと鋭いきしみをたてた。オモニはぎくっと体をすくめてあわてて後をふり向いた。信之もオモニみたいにびっくりして体がすくんだ。だから信之もオモニをまねて警戒するように背のびして後ろを見た。すると冷たい風がふわりと動いて鼻をくすぐるようだ。信之は急にクシャミが出た。もう一つ出そうになったのをがまんしようとすると、思わずシャックリが出た。オモニがしいっと小さい声で静かにするのだと背中をゆすった。だが、ただそれだけで後はなにごともおこりはしなかった。

オモニはまっくらな道を荷馬みたいにせっせと歩いた。オモニは、はあはあ息をき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

らしてとても苦しそうだった。それでもオモニはわき見もしなかった。信之は村はずれの道で薄眼をあけてそっと松林を覗いてみた。肩をくんだ人間みたいな格好をした松の木が暗い闇の中でふわふわ動いて見える。髪の毛をばらばらにした婆さんみたいな黒い木の影が、ほおらここにいるぞとでもいうように信之の眼のなかへおしよせてくるようだった。信之は急にこわくなってオモニの背中にかじりついた。

村の道はとても歩きにくい。昼間でも往来する人たちをひどく困らせるごろた石やでこぼこだらけの田舎道だった。それでもオモニは休みもしないでいそがしそうに歩きつづけた。山道の登りにかかっても、オモニの足は早かった。オモニは前かがみになって坂道をせかせか登りつづけた。オモニが前かがみになると背中の信之も体が前のめりになるようだった。オモニが息をきらせると信之もやはり息がきれた。腹をおさえられて息苦しかった。丘をこえて下り坂にかかるとオモニは腰をのばしてどんどん歩いた。すると信之の背すじもひとりでにのびて体が楽になった。なにもかもオモニといっしょだった。いつもと違ったところはちっともなかった。信之は安心してよかったのだ。オモニがどこへ行くのかよくわからなかったけれども、それはオモニに

まかせておけばよいことだった。だから信之は、いつとはなしにオモニの背中でねむりこんでしまったのだ。

翌る朝、信之が眼をさましてみると、まったく知らない家にきていた。房の中にいても、強い風が吹いていたので海鳴りの音が大きくきこえた。はじめのうち信之は浜辺のハルモニ(祖母)の家かと思っていたら、そうではなかった。房の押戸のすき間から外をそっと覗いて見たが賛河(チャンハ)おじさんの家でもなかった。おじさんの家だったら、庭のずうっと向うに高い漢拏山(ハルラサン)が見えるはずだった。だから信之はかえってほっとした。賛河おじさんはオモニと仲がわるいからだ。信之も賛河おじさんが好きではなかった。いつもこわい顔をしてこごとばかりいう。それに賛河おじさんちのおばさんも信之に意地がわるい。顔にあばたのあるおばさんは、髪の毛がぼうぼうで眼がみみずくみたいにぎょろりとしてでっかい。信之が通りがかりに石垣の角からおばさんちの庭を覗いたりすると、おばさんは両手を翼みたいにひろげて、しいっ、しいっ、寄りつくじゃねえ、帰えるだ、行くだと信之を追いはらったりする。みみずくが人間の

ことばでおどかしているようでとてもこわい。でも、ここは賛河おじさんの家ではない。天井のひくい狭い壁のちいさな薄暗い房には、オモニと信之の二人きりだ。信之はオモニにたずねてみた。

「ここは、どこ？」

「ミナト、さ」

「ミナトって、なあに？」

「船にのる所なんさ」

「船？　じゃあ、船にのるの、オモニとおれは、どっかへ行くの？」

「行かなくってさ、だけど、船なんかちっともおっかなくねえだ、あたしたちはね、船で、遠い所へ行くんだよ」

「とおいところへ？……なにしに行くだ？」

「そりゃあ、くらしにさ、うんとたのしく、くらしにさ、信之！」

オモニは信之の小さな体をしっかり抱きしめると、そのやんちゃな顔にいくどもやわらかく頬ずりした。そして、とてもたのしそうに笑いつづけた。

その日は、信之がひとりで房の外へ遊びに出ようとしても、オモニはどうしてもゆるしてくれなかった。これはおかしいことだった。信之がしつこくそのわけをたずねると、オモニの答えはよけいに変だった。

「よくない人が、外に居るかもしれねえべえ、信之、なんだって、気をつけるもんなんさ」

まったくオモニは用心深いたちだった。でも、家にいるときでも、よそへ客にいったときでも、遠くへ行くなと注意されたことはあっても、外へ出るなと止められたのはこれまでにないことだ。これがもし、蛇の穴へ指先を突っこんではいけないという注意だったら、信之もそのわけはよくわかっていた。そんなわるさをやると、蛇にがぶりとやられて指がくさってしまうのだ。野ねずみの穴へ小便をするのもいけないことだ。そんないたずらをしたら、たちまちチンポコがはれあがって痛いめにあわねばならないだろう。野ねずみの穴には毒があるんだから。それにあのきみのわるい百足虫だってとてもあぶない。うかつに指でつかまえたりするとたちまち刺されてひどい

めにあう。信之はいつか耳が痛くてひと晩中なきあかしたことがあった。とても困ったオモニはあくる日、明るくなってから信之の耳の穴を覗いてみておどろいた。耳の奥に図々しくも小さな百足虫がもぐりこんでいたのだ。百足虫だって子供はきっといろんないたずらをするのだろう。オモニは花玉婆さんに相談した。花玉婆さんはとしよりだからいろんなことをよく知っていた。百足虫はゴマ油が好きだ。だからオモニたちは信之の耳たぶにゴマ油をぬりつけて根気よく待った。するとどうだろう、食いしんぼうの百足虫はゴマ油の匂いを嗅いで、もぞもぞと耳の穴からはい出してきたのだ。そうでなかったら、信之は耳がきこえなくなったか、ひょっとすると死ぬようなめにあっていたかもしれないだろう。百足虫にも決して近づいてはならないのだ。

それにオモニがいちばん嫌がることは、夜、うっかりしてふとんにそそうをすることだった。いつかの夜もとうとうしくじって、オモニのいいつけで信之は小さな竹ざると箒をもたされ、花玉婆さんのところへ〈塩〉をもらいにやらされた。この〈塩〉はからくはなかったけれど、体がひりひり痛くなる塩なのだ。花玉婆さんは信之がしぶしぶさし出した竹ざるを信之の頭に冠せると、拍子をつけながら箒で信之の頭を

ひっぱたく。暖かい季節だから信之はすっ裸だ。

小便たれるな、そそうをするな、

これにこりたら、またするな！

泣いて悔しがっても、ちっとやそっとでは許してもらえない。へたに泣声をたてると、近所の子供まですっとんできて、〈塩〉やれ、もっとやれと面白がってわいわいはやしたてる。両手でチンポコをおさえたすっ裸の信之ははずかしくてたまらない。うっかり寝小便をやった村の子供たちは、ふるくからのこのお仕置をまぬがれることはできないのだ。信之はこんなにたくさんやってはいけないことをしっていた。ただ、よくない人がいるかもしれないから表へ出るなといいつけられたのは、はじめてのことだ。これは信之にはまだよくのみこめなかった。

ひょっとしたら表にはあの嫌な巡査(スンサ)がいるのかもしれない。村の駐在所の日本人巡査は黒い服にひげを生やしたひどくこわい顔をしていた。おまけに腰につるした白く

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com